The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ゆるやかな転換 : 事例研究にみる老女たち
Author(s)	水嶋, 陽子
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 215-230
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ゆるやかな転換

——事例研究にみる老女たち——

水嶋　陽子

〈要旨〉

本稿は、老女の生き方について、調査事例をもとにした準備考察を行なう。かつて女性のライフコースには「しゃもじ渡し」という転機があり、主婦役割を終えた女性には姑の座が準備されていた。しかし現代日本社会においては、文化的制度としての姑の座はあいまいになっている。そのため主婦役割が縮小した後の女性の生き方は不透明だといわれる。ここではライフヒストリーの手法を用いて、当事者である女性が主婦役割の縮小にどのように対処し、その後にどのような人間関係を再構成しているかを検討する。

紹介するのは、七五歳、七二歳、六五歳の女性の事例である。そこからは、主婦役割の縮小後、ゆたかな人間関係をつくりだしていく老女の姿が浮かび上がってくる。主婦役割の縮小という体験は当事者の中核的な自己イメージを変化させず、老女はむしろ人間関係を再編することで以前からの自己イメージをより確かなものにしている。つまり主婦役割の縮小は、生き方の根本的な変更をせまるドラスティックな転機ではないため、女性のライフコース上において、それはゆるやかな転機といえるだろう。

老い研究のなかで、老女をテーマにした研究はあまり多いとはいえない。そのため本稿で得た知見を安易に一般化することはさしひかえ、女性の老いの一側面として指摘するにとどまっている。しかしここからは今後の研究の糸口を示すとともに、より具体的な調査の必要性を提起できる。

キーワード

ライフヒストリー、女性の老い、主婦役割、転機

1　はじめに

映画『八月の鯨』は老いた姉妹の日常生活を描いた作品であり、映画界における「老女という新しいヒロインの発見」[1]だったといわれる。たしかにそれ以後、『ドライビング・ミス・デイジー』『フライド・グリーン・トマト』『ジョイ・ラック・クラブ』など、老女はたびたびスクリーンに登場するようになった。そして彼女たちは誰一人として、「もう歳だから」といって一歩さがってはいない。周囲の人々に対してたくましい自己主張をつらぬいて毎日を送っている。例えば田辺聖子が描く「姥シリーズ」[2]のように、日本の老女のなかにも人生からおりる気配はない、しかし中年期とは違うといった生き方があるようだ。そこで本稿ではインタヴュー調査に基づき、老女の生き方にアプローチしたい。

2　女性の老いとライフヒストリー

(1) しゃもじ渡しの時期

しゃもじはかつて、主婦権の象徴だった。しゃもじを握るものが、主婦の座にあって一家の家事を取り仕切るのである。そして多くの場合、主婦の座をおりるのは、その家に嫁という新しい主婦が登場するときだった。「しゃもじ渡し」は主婦としての時代の終わりを意味しており、女性の一生において一つの転換点だった。しゃもじを渡した女性には「姑の座」が準備されていて、姑には新参者の嫁を、商家なら商家、農家なら農家としての、その家の主婦にふさわしく教育する役割があった。[3]

今日、嫁にしゃもじを譲り渡すことは少なくなり、文化的な制度としての姑の座はおおきくゆらぐ。そのため主婦としての役割が軽減する時期をむかえた後、女性のゆくては不透明になる。子供が巣立った後に発生する空の巣症候群も広く知られており、主婦役割の縮小を経験する中高年期は、女性にとって青年期とならぶ危機の時期だと認識されている。[4]

しかし女性のライフコースにおいて、主婦役割の縮小が一義的な意味しかもたない経験であるとは考えにくい。老年期に期待される社会的な役割が、青年期や中年期と比べて少ないことは、「老いのラディカリズム」[5]といわれるように、高齢者に社会的な規範からの自由をもたらす側面もある。姑の座という行き先を失うことは、そこにおさまる必要がなくなることでもある。つまり主婦役割を終えた女性には、その後のライフステージをどう生きるかは本人次第といっても良い状況が、ある程度ひらかれている。そこで本稿では、現代日本社会のなかでごく当たり前に生きている老女を事例に、主婦役割縮小後の生き方について考えてみたい。ここでいう主婦役割とは、家族という人間関係の中で遂行される家事労働を担うことである。主婦としての役割の終わりは、おおよその目安として子供が卒業、就職、結婚などで独立し、子育ての責任を終えたときとする。

先に断り書きをしておくと、老女とりわけ姑に関しては多くのこ

とがいわれており、老女を題材にした研究も少なからずある。[6] そこでは家のなかで介護役割から離れられない老女や嫁への不満をくすぶらせて毎日を過ごす老女、逆に大都市で外にであるくことを日課にする老女など、興味深い多様な老女像が提出されている。しかし全般的にみて、提示された老女像のどこが女性の老いの特徴といえるのか、さらには男性の老いや中年期の女性と比較した場合、いかなる点が女性の老いの独自性であるかという角度からの議論は、すすんでいない。そのため老いるという経験それ自体に関心を持って眺めると、女性の老いについては、よくわかっていない部分が意外と多いのである。

欧米ではごく最近、女性の老いの独自性に関する研究が始まっており、研究の糸口として主婦であったこと、主婦役割を遂行していたことが、その後に続く老年期の生き方やセルフイメージにも影響を及ぼしている点に注目が集まっている。[7] しかし女性の老いを議論するための、確かな手がかりとなる定説はまだ出されていないのが現状だ。

ゆえに本稿は主婦役割縮小後の女性の生き方に着目し、女性の老いの独自性を考える第一歩としたい。そのため特定の理論や仮説の検証ではなく、テーマの発見をめざすことになる。現在はパイロットスタディの段階であるが、それを通して、女性の老いがもつ目につきやすい側面のいくつかを「探索」してみたいと考えた。

(2) 手法としてのライフヒストリー

主婦役割の縮小という経験と、その後の生き方を捉えるために、ここではライフヒストリーの手法をもちいる。老いの研究においてはこのところ、研究対象が具体的な個人の経験する老いへもひろがり始めた[8]のにともない、ライフヒストリーの手法がしばしば利用されている。[9] ここで諸研究のレビューをしたり、詳細な検討を加えることは無理であるが、先行のライフヒストリー調査から明らかになった「連続性」(continuity) について確認しておきたい。連続性とは、自分の歩んできた過去と現在の間の連続性である。高齢化にともなう身体的、社会的変化にかかわらず、当事者は連続性の感覚が保持できる物語を作り出していると指摘されている。[10]

アメリカの人類学者カウフマンは、ライフストーリーを貫く「(人生の)テーマ」の存在を強調する。テーマとは、高齢者がこれまでの人生で作り上げてきた自分自身の姿や、社会生活とのかかわり方にたいする統一的認識である。テーマには二通りあり、自発的決定、黙従、情緒的結びつきなど、この世界を生きる上でその人物の身の処し方に関して説明的ラベルで表現されるものと、結婚、仕事など、その人物にとって象徴的な意味をもつ社会構造上のトピックで表現されるものがある。[11] そして老年期には、人は自分のテーマにそって統合したアイデンティティをつくりあげ、自分の歩んできた道筋について語る。自分のテーマにそって統合された過去の記憶(意味の源泉)を拠り所にして、老年期にまつわる事柄や自分自身に新たな解釈を与え、現在を生きる意味をつくりだすのである。[12] そのためトピックで表現されるものでも生き方に関する説明的ラベルで表現さ

れるものでも、テーマは自分の存在感の中核をなすものであり、同時にその個人の老年期の経験を解釈し、評価する手段といえる。

先に述べると、本稿であつかう三事例においても、ライフストーリー全体を貫く一貫性をもった生活態度が浮かび上がってきた。「クリスチャンになってからのご縁」に従って活動を展開すること、母親として生きること、社会と関わりを持つ主婦というのは、事例となった各人の自己定義であり、また現在の生き方の説明である。それらは、カウフマンのいう（人生の）テーマに相当するようだ。そもそも主婦役割の縮小はそれまでの生き方との非連続性を含む出来事であるため、危機といわれている。だがこのテーマと関連させることで、主婦役割の縮小、およびその後の人間関係がもつ意味を、当事者の人生の文脈において捉えかえしてみたい。そこからは主婦役割の縮小が、これまでとは別の見え方をするのではないかと考える。

3　調査の概要

現在六五歳以上の女性を対象にインタヴュー調査を行なった。調査対象となった女性たちの世代は、大正から昭和初期（戦前）に生まれ、戦前に教育をうけ、戦中、戦後に結婚した人々である。家族史の観点からこの世代を位置づけると、主婦という生活形態で人生の大半を過ごすライフコースが女性の標準的な生き方となる、過渡期及び初期の世代にあたる。[13] 彼女たちは、自分自身が老いたときには、自分たちが若いころにみた典型的な「しゃもじ渡し」を経験することがなくなり、姑の座があやふやなものになった。そのため、新しい老いの生き方を模索した最初の世代といえる。

インタヴュー調査の対象となるのは、主婦役割の縮小を経験する人物、つまり既婚（死別を含む）で子供を持つ人にしぼられる。ただしパイロットスタディとしての本稿の性質上、老女の生き方を発見するための糸口をえるチャンスを最大にしておきたいと考えた。そのため調査対象者には、人生の大半をいわゆる専業主婦として過ごした人もいるし、社会人として働き続けた人もいるという構成にした。[14] いずれの事例においても①では主婦役割が縮小するまでの生き方、②では現在の生き方、人間関係についてまとめる。③では、主婦役割縮小に対して、①と②をつらぬく人生のテーマがどのように関連しているかを考察する。それではまず、現在七五歳のFさんから始めたい。

4　主婦からの転換点

（1）Fさん（七五歳）の場合

①主婦役割縮小まで

Fさんは大正十年、茨城県日立市に生まれた。地元の女学校を終えると、五歳上の姉が通っていた東京の専門学校へすすみ、卒業後は親元で花嫁修業をしてすごした。お見合いをして婚約をしたものの婚約者は南方に出征したため、結婚したのは戦後である。「（無事

に帰ってきたのだから）何しろこの人と結婚せんならん」という気持ちで大阪へ嫁にいき、子供を一人生んだ。しかし夫は結婚五年目に結核でなくなった。

夫の死後、家にはおばあさんが二人（大姑と姑）、おじいさん（舅）、子供と嫁の自分が残された。若いFさんが主力となって家事をきりもりしたが、子供は三人の年寄りに可愛がられたため、自分一人で子供を育てたという感覚はない。主婦業の合間をぬって、弁護士だったおじいさん（舅）の秘書兼カバン持ちとして事務所にでることも多かった。「一家の糧はおじいさんだし、そのおじいさんの仕事を助けることがこの家を助けること」と思い、現金収入のないことに不満はなかった。むしろ大姑と姑のいる家を離れ、外に出られるのがうれしかったという。

なぜなら、東京流に育ったFさんの価値観や言葉づかいは二人の姑と全然違い、当時Fさんは両方の姑と衝突をくりかえしていたのである。姑たちに肩をそびやかして毎日を過ごす自分にも、うんざりしていた。「このままじゃいけないと、何かを求めていたんでしょうね」と言うとおり、早起き会に参加したり、月参りにやってくるお坊さんのお寺に説法を聴きにいってみた。そうしたある日、隣の奥さんに誘われていったのが、日本キリスト教団の教会である。これまではお祈りといえば「家内安全、商売繁盛」という、自分のことをお願いするものと思っていたが、礼拝でなされる祈祷にびっくりした。世界平和に始まり、病床にいる人や今日礼拝にこれない人をお守りくださいと、他人のことばかりお祈りしていたのである。何か惹かれるものを感じて、このときから日曜ごとにキリスト教教会の礼拝に参加するようになった。

洗礼を受けてクリスチャンになってからは、クリスチャンとして何か社会で働きたいと思い、矯風会（キリスト教系の慈善団体）の大阪支部に入った。幸い弁護士だったおじいさんの理解もあり、仕事の少ないときは、矯風会の活動として酒害防止、売春防止のための街頭キャンペーンにたったり、婦人ホームや少年の家への慰問に参加した。

②現在の生活

主婦としての生活が大きく変わったのは、五十才のときである。その二年前に二人の姑は相次でなくなり、その後は舅の看護に明け暮れた。そして舅の死と子供の巣立ちが重なった。子供は大学卒業と同時に婚約し、研修で会社の寮に入り、家にはFさんだけが残ったのである。「みんな終わっちゃってね。独りぼっちになっちゃたの」とFさんはふりかえる。この時Fさんの行くところは、日曜日の教会と矯風会大阪支部だけだった。自分しかいない家のなかで、夜中に震えがとまらないことが続き、それを知った矯風会大阪支部長は、電話相談の勉強をすることをすすめてくれた。Fさんは、いのちの電話がボランティア育成の目的で開設した講座に通いはじめ、ここを皮切りにその後、さまざまな活動に参加する。現在日常的な活動は三つある。

一つ目は、自殺防止センターでのボランティアだ。ここはいのち

の電話が呼び水になって、その後につくられた電話相談の団体である。かかってくる電話は「今、薬を飲んだ」というものや、逆に何もいわない無言電話など千差万別である。それらに対処するのは難しいことも多く、精神的な負担も大きい。そのためここ四ー五年は電話をとることはやめ、センターが主催する、電話をかけてきた人たちの扶助グループに関わっている。週に二回、センター内のラウンジで集まりがもたれ、Fさんはそこに来た人たちの話相手をしている。そして昨年からは、震災後の仮設住宅を訪問する活動があり、Fさんも月に一度、芦屋の仮設住宅内にある集会所に、仲間とともに出向く。ここのボランティアは大半が五十代の女性だが、Fさんは十五年前のセンター設立時からの最古参であるため、ラウンジでおしゃべりしているときも、芦屋にいくときも、みんなが「おばあちゃん」として大事にしてくれるという。

二つ目は教会である。毎週日曜日には、四十年のつきあいになる隣の奥さんと二人で駅からタクシーを利用して礼拝にでる。教会はかなり急傾斜な坂の上にあり、二人とも足が弱ったためだ。礼拝が終わってからは、聖歌隊のメンバーであるため歌の練習をする。もともと歌を歌うのが好きだし、クリスマスの前などには新しい歌を覚えられるのが楽しみだ。時には他の人と連れ立って、入院中の教会の友人へのお見舞いに行くこともある。教会には似た年齢で長いつきあいの人が多く、そうした友人の死は自分の老いを痛感させる出来事である。

三つ目に老人大学の友人つきあいがある。七十歳の時、親しい人が三人相次でなくなり、体調を崩して入院した。その時、いのちの電話の頃の知り合いで、クリスチャンだった人のすすめで老人大学へ入った。在学中に同期の人たちとコーラスクラブをつくり、今もそのメンバーで月に一度、公民館を借りて練習している。このクラブの講師をしている女性が急用でこられなくなったときも、せっかく全員が「今日はコーラスの日」として心待ちにしていたため、集まって箕面の森を散策し、お食事をして帰ってきた。ハイキングクラブや山野草の会にも老人大学の縁で参加しているが、いずれも親睦を深める社交の要素がつよい集団である。

③「クリスチャンになってからのご縁」

Fさんのライフコースのなかで、五十歳の時に直面した子供の巣立ちと舅の死は、精神的なダメージをともなう経験だった。夫の死後も一家の主婦として生きてきたFさんは、主婦としての彼女を必要とする家族を失った時、たとえば「おばあちゃん」と呼んで彼女を慕う自殺防止センターの仲間のように、自分を必要としてくれるものが必要だった。彼女はそうした人間関係を、教会がらみの人物が紹介する活動（電話相談や老人大学など）に関わることでつくりだしてきた。そのためボランティアの仲間や老人大学の友人など、現在の人間関係は主婦役割縮小後につくられたものだ。

しかし本人は、現在の人間関係を主婦役割の縮小ではなく、クリスチャンになったことをきっかけに捉えている。受洗の後、矯風会でクリスチャンとしての社会奉仕の活動を始め、そこで矯風会の支

部長さんに出会ったことが、五十歳の危機にも電話相談のボランティアへすすむ道を開いた。教会の友人を別にすると、現在の老人大学の友人も、自殺防止センターの仲間も、教会に関わりのある人は少ない。だがそこまで導いてくれたのは、矯風会の支部長さんやいのちの電話の友人など、「クリスチャンになってからのご縁」なのだ。つまり人生のなかでクリスチャンになったのが大きかったというように、生き方の方向性は教会との出会い以後、変化していない。そして主婦役割の縮小は、これまでと同じ方向性でより具体的な活動を展開するきっかけとなる出来事だった。そのため現在の人間関係は、「クリスチャンになってからのご縁」がもたらしたものとして、本人には連続性をもって捉えられている。

そして現在からふりかえると、主婦役割の縮小には解放の要素もあったようだ。「(家族が)だれもいなくなってすきにできるようになっ」た今が、子供時代とならんで楽しいという。子供の頃から好きだったコーラスやハイキングを、老人大学の友人とのつきあいでできるようになったことも大きい。もちろん近年、長い間親しくしてきた友人の死に出会うことが多くなり、自分自身も足腰が痛いこともふえた。だがボランティアやコーラスなど外にでて人にあってくれば、朝は痛かった腰や足も治っている。そのためすでに大阪に血縁はないが、まだヨソ(東京にいる息子夫婦のところ)にいく気はない。なぜなら中年期の教会との関わり以後、「クリスチャンになってからのご縁」によってつくりあげてきた活動の基盤が大阪にあり、その人間関係のなかに生きているためだ。

(2) Sさん(七二歳)の場合

①主婦役割縮小まで

Sさんは大正十二年、福岡で生まれた。父親の転勤により、台湾、静岡、名古屋、東京、満州と転々とするが、女学校を卒業した後は満州でピアノや洋裁をならって花嫁修業をした。親のすすめで結婚し、京城(現在のソウル)へいったのは二一才のときである。終戦、引き上げを経て、夫はもとの会社に戻り、Sさんは三人の子供を生み、社宅住まいの主婦として毎日を過ごしていた。

Sさんにとって人生最大の転機だったのは、結婚一五年目にあたる三五才のとき、夫を癌で亡くしたことだ。夫の両親は既になくなっていたため、Sさんは小学校六年生を筆頭に子供三人をかかえて東京の実家に身をよせた。夫の会社の斡旋で職を得たため、Sさんの生活は「社会人と母の二役をこなす」ものへと変化する。月曜から土曜まで働いて、家にかえったらお母さんという毎日を母として当然と思うように努め、子供にも過去をふりかえらないようにいいきかせていた。当時のSさんは、職業を持つ女性が集まる会(J会)に参加している。月に一度集まり読書をする会だが、会社と家の板挟みや会社でのストレスなど、働く女性が抱える問題を話せる仲間のいるところ、そして新しいエネルギーをえるところだった。Sさんが女手ひとつで子供を育ててきたことを実感したのは、次男の大学卒業時に学校側の依頼で父兄代表としてあいさつをした時と、長男の結婚の時である。「そういえば、夫なしでここまできた」と思

うと感慨深く、またうれしい出来事だった。五十代後半の五年間のうちに、子供たちは相次いで結婚して家を離れ、両親も見送った。

②現在の生活

五七才のとき、Sさんは二三年間勤めた会社を辞めた。五五歳の定年後も顧問として働いていたが、子供が手を離れると、営利団体で勤めることはストレスがたまるという気持ちが強くなったためだ。Sさんは、娘に紹介されて音楽教育を行なう学校に勤めることにした。子供相手ののんびりとした職場なので、Sさんはずっと働いているつもりだった。だが娘の病気を理由に、七一才の時に退職をする。少し残念でもあったが、「子供にとっては私が一番力になれる存在だから」と納得して辞めた。これがSさんの引退である。

現在の生活の中心は、子供家族との関係、とりわけ娘の介護である。週に三日、娘の家に泊まり一週間分の家事をしてくる。「私がおろおろしたり泣いてる母親ではなく、いいわよ、どうにかしましょうって引き受けちゃうから子供たちも相談をもちかけるんでしょうね」というように、子供が結婚したあとも三人の子供とのつながりは強い。息子の会社が倒産したときに経済的支援をしたり、娘の介護が必要になると退職したりという具合に、母親として子供家族との結びつきをつくってきた。「いまだに気になり面倒を見たくなる」という言葉どおり、Sさんは現在の日常生活においても、嫁に頼まれれば息子の家で料理を作るし、息子や娘の夫の経営している会社（事務所）の帳簿をつける。それゆえにSさんは現在一人暮らしであるが、自分を「ボス猿」にたとえ、自分を頂点に三人の子供とそれぞれの配偶者、孫たちを統合した一三人が自分の家族だという。

こうした家族とのつきあいの他に、定期的に参加しているつきあいが三つある。いずれも第二の職場に移ったのちに始めたものだ。一つ目は、コーラスである。月に二度、もとの勤め先である音楽教室が開くママさんコーラスの教室に通っている。譜面があまり読めないので難しい曲はついていくのがたいへんだが、Sさんにとっては、趣味と健康を目的にした活動である。また女学校の同窓生が集まるコーラスの会でも月に一度歌っている。Sさんがこの会に参加を始めたのは、七、八年前に友人に誘われてからだ。こちらはうまく歌うことよりも楽しく歌うことに重点が置かれた、一種の親睦会である。

二つ目は、第一の職場にいたころから参加していたJ会である。第二の職場に移った頃から、この会のために自宅を会場として提供している。当時J会は都心で開かれていたが、Sさんの近所に住む会員が増えたので彼女たちの足の便を考えて、J会の分派をつくったのだ。そしていまも月に一度、七、八人の会員とともに、夜に読書の会を開いている。

三つ目は教会である。働いていた頃は日曜日は家事をする日だったため、礼拝には月二回ぐらいしか出られなかったが、今は毎週礼拝にいく。また教会内の「ミートローフの会」では、ここ十年ほどリーダーである。この会には十二、三人のメンバーがおり、活動目

的は「東アフリカのこどもを救う会」への寄付金をつくることだ。そのため土曜日に教会でミートローフを焼き、日曜日の礼拝の後にそれを売っている。

③母親として過ごした一生

Sさんは「要するに母として子供のために生きた一生」というように、夫の死という転機以後、常に母親である。職業生活はそもそも母親業の一部であり、また退職も母親であることを理由にしたものだった。そのため二つの職場で合計三五年間働いたが、退職をして社会人でなくなることは大きな意味をもつ出来事ではなかった。そしてまた、五十代半ばに両親を見送り、三人の子供も家を出て一人暮らしになったが、主婦役割縮小にともなう精神的ダメージも語られない。母親としては「今も甘えた気持ちはでてきていない」というとおり、現在も娘のところで家事をするなど、母親として子供とその家族を助けている。おそらく精神的には以前と同じ状態で子供家族との関係を維持し、母親であり続けているためだろう。

もちろん子供が結婚し家を出れば、自分が稼いで子供を養う必要がなくなる。そのため働くことに対する義務感は多少弱まるようだ。子供たちの結婚で「精神的に解放された」というように、のんびりできる職場に移る。また女学校の友人とのコーラスや、教会の仲間との活動、J会を自宅で開催することなど、中年期から関わりをもっていた活動に積極的にかかわるのは、子供が家を離れてからだ。このように主婦役割縮小後、多少は自分の好きなことをやってみる自由を得て、人間関係も広がった。だがSさんが子供への母という立場に高いプライオリティをおいて生きていることに変化はない。そのため現在の心境として「子供はもうどれも持ち家で、子供（Sさんからみた孫）がいるから別れないだろうし。心配ないなら、十分働いたしもういつ呼ばれてもいい」という。

（3）Yさん（六五歳）の場合

①主婦役割縮小まで

Yさんは、一九三十（昭和五）年、ブラジルのサンパウロで生まれた。父親はブラジル移民を統括する仕事に携わり、母親は六人の子供を育てるかたわら、日系女性の生活指導にあたった。戦前にしては進歩的な母親は、「どんなに忙しいときも社説は読みなさい。そうすれば社会の動きはわかるから。」といい、Yさんは社会に目をむけるように、そして自分の頭で考えて行動するようにと育てられた。学齢期は戦時中だったが、ドイツ系、イギリス系、アフリカ系と人種的に入り交じった学校で過ごす。そして戦後、日系の銀行に勤め、社内の日本人と結婚した。結婚直後に相次いで両親がなくなり、二九才のとき夫の都合で娘（長女）とともに日本へ来た。

日本にきて最初の二年間を夫の両親と同居したほかは、核家族の主婦として過ごした。第二子は、死産や子宮筋腫を体験した後に生まれたため、「この子は楽しんで育てよう」という気持ちで、実際に子育てを楽しんだ。だが次女の小学校卒業の頃には五十歳近くになっており、働く機会はなかった。Yさんは専業主婦として過ごし

た長い育児期の間に、ある雑誌の愛読者が地域でつくる集まり（T会）に入会している。この雑誌の創刊者の著作集を母親がブラジルでもよんでおり、この集まりを知ったとき、「ここが私の求めていたものだ」と思った。なぜならYさんにとって、家庭を守るかたわら日系女性の生活指導など社会的な活動をしていた母親は、人生モデルとして絶対的存在だった。そしてこの会には、「主婦として社会に関わりをもって生きる」という考えをもつ人たちが集まっていたのである。YさんはT会で生き方を共有できる仲間をえることになる。

Yさんにとって「一大転機だった」のは、五十才のときの乳癌である。癌を告知されたときショックはもちろんあったが、治るならなおそうという気持ちだった。次女がまだ中学二年生だったため、「あの子の中学卒業までは生きていたい」と思い、手術の後にむかえた次女の卒業式は、どうにか生きてこれたことを実感する出来事だった。

そして正確には、乳癌よりも乳癌後の体験がYさんの生活態度に変更をもたらした。手術後四－五年のうちに同室だった自分以外の三人は亡くなったのである。みな自分と似た年齢で同じ乳癌の手術を受けたのに、自分だけが癌の再発をまぬがれ生き残っていることを知った。そのとき、助かった自分の命を自分のためだけに独り占めして使うのは申し訳ない気持ちになった。こうしてYさんは手術後の安静期のあいだに、自分にできる社会的活動を探しはじめていた。

②現在の生活

子供の卒業、就職、結婚と続く時期が、夫が定年退職して徐々に務めを減らしていく時期と重なった。そしてYさんが六十才の頃に、ほぼ現在の生活スタイルになった。二つのボランティアと友人つきあいを中心に出歩くことも多いが、現在の生活の中心は夫である。「割り切らないと好きなことができないから」といってボランティアなどをするが、退職した夫が一日中家におり、夫の行動にはできるかぎりつきあえるように時間的余裕を残したいので、これ以上ボランティアを増やすつもりはないという。ボランティアは、「細く長く、家庭に支障のない範囲で」捧げるものだ。

一つ目のボランティアは、市がすすめる「明るい老後を考える会」の活動である。ボランティアをでき、同時に自分と夫の老後を考えていける良いチャンスだと思い、五七才から参加した。Yさんのいるお食事班の活動は、毎日交代制で食事をつくり、注文を受けた老人宅にそれを宅配することである。メンバーは子育てを終えた五十、六十代の女性たちと定年退職した男性だ。男性は少人数だが、つくった食事を宅配するための貴重な戦力である。Yさんは月曜日のリーダーで、十人の女性とともに、市の会館で百二十食をつくっている。いつかは、宅配された食事をひとりで家で食べるのではなく、週に一度でも二度でも集まって会食できるようなシステムにしたいとボランティア仲間と話している。

二つ目はブラジル人の通訳である。きっかけになったのは、六一

才の時、市の教育委員会からブラジル人児童のための通訳を依頼されたことである。隣接する市がサッカーのJリーグを誘致し、ブラジルから招いた監督やコーチの家族がYさんのいる市内に住みはじめたため、ブラジル人の家族たちを地域で受け入れる対策が必要になったのである。Yさんは地域の学校をいくつか担当し、個人面談などの時に学校へ行って通訳をした。その後、担当した子供を媒介に、いく組かの家族とは、困ったときは電話をもらいかけつける、互いに家に招き合うといった家族ぐるみのつきあいに発展した。いちばん多いのは病院へ同行することで、受診手続き、医師への病状の説明、ブラジル人への投薬や治療の説明、次回の予約の申し込み等をしている。このボランティアは、夫とともにでられる出先が増えるというメリットがある。いくら割り切っていても、やはり夫が家にいて自分一人が外で楽しむのは気がひける。けれどもブラジル人家庭とのつきあいは、その開放的な雰囲気が夫にも馴染みやすいようだし、たびたびもらうJリーグのチケットは、サッカー好きの夫とでかけるのにちょうど良い。

Yさんの友人関係は、以前から属していたT会である。今も週に一回の例会に出席する。同年代の人の多くは子供や孫と病気の話だけなのでYさんには物足りない。だがこの会にいる四十代、五十代の人は、自分の考えをはっきりという、家族以外にも目をむけている人が多いため、「自分の考えとあう」ので好きである。

③社会と関わりをもつ主婦

Yさんは自分の人生のなかで、乳癌にかかったことを人生の大きな出来事だったという。そして現在の活動を、乳癌をきっかけに始めたものと捉える。人生モデルとしての母親の存在があり、そしてながい育児期の間にも働きにでなかったが、「社会とつながっていれば十分だと思っていたし、それはT会にいることで多少は満たされていた」。主婦として社会と関わるという現在の生活態度は、こうした素地があり、乳癌をきっかけに確立したのである。そのため子供の独立とボランティアの開始は時期的には重なっているが、子供の独立が転機とはなっていない。子供の独立とは関係なく、彼女にとってT会の人々は、社会に目をむけた主婦という自分の生き方を理解し、支えてくれる仲間であり続けている。

だが「家庭に支障のない範囲でやるボランティア」をすることができたのは、子育てを終え、時間にゆとりができた後だ。Yさんの場合、「やりたいことが主婦のこと」であり、「ボランティアも主婦の仕事の延長」だというように、感覚としては、かつては子供だった主婦の仕事の対象を、食事の宅配を注文する老人や通訳を必要とするブラジル人家庭に広げているのである。人間関係はその結果、主婦役割縮小後に広がった。

ここで着目したいのは、Yさんの人間関係の広がっていく方向性である。「明るい老後を考える会」は、自分と夫の老後を念頭に入れて参加した。そしてブラジル人へのボランティアは、夫の人間関係を広げることの一助になっている。「一日でもいいから先に死んでくれるな」という夫は、バードウォッチングをする探鳥会にも、

一人では見知らぬ人の中にでていくことに抵抗があるようだ。子供の独立以後はそうした夫を中心に生活するYさんは、自分のテーマにそって人間関係を拡張していく過程で、同時に、退職した夫のライフスタイル形成をリードしているとみえる。Yさんと夫の関係は子供が巣立ったあとの脱け殻ではなく、老いをともに歩む夫婦として新しい関係形成に向けて変化している。

5　まとめと議論

本稿では、女性のライフコース上で転換点とされる主婦役割が縮小する時期に着目し、それを当事者がどう捉え、いかに対処しているかについて三つの事例を紹介してきた。ライフヒストリー法を用いて主観的な意味付けに光をあててみると、二つのことが明らかになる。まず一点目として、主婦役割の縮小はライフコース上の転換点として認識されていない。

今回の事例のなかで唯一、主婦役割の縮小が精神的ダメージとなったFさんも、主婦役割の縮小は生活態度の変更にはいたらない。Fさんは自分の現在の人間関係を教会の縁に結びつけて語り、洗礼を受けたときからクリスチャンとしての活動に目をむけていた。つまり「クリスチャンになってからのご縁」に従って活動を展開するという生活態度は、主婦役割が縮小する以前からのものである。その生活態度を具体化したものが、老人大学や教会の友人、電話相談の仲間など現在の人間関係である。またSさんの場合には、現在も、母親であることを中心に人生は組み立てられている。子供の結婚は精神的な解放をもたらしたが、それは母と子の関係の終りではなかった。子供のために第二の職場を辞めるなど、その後も助けを必要とする子供とそれを助ける母という人間関係が持ち続けられるように、自分の活動や他の社会関係を調節していく。Yさんの場合には、乳癌をへて社会と関わりをもつ主婦という生活態度が明確になり、現在はその生活態度にそった活動を実行している。それぞれの生活態度とは、先述のカウフマンがいう（人生の）テーマに相当する。そして三人とも主婦役割が縮小する以前からのテーマを変更することなく、主婦役割縮小という出来事に対処している。

二点目として、主婦役割の縮小をきっかけに人間関係は再編され、当事者はそれらを以前からもっていた関わりの拡張としてとらえている。こうして再編された人間関係は、今回の事例からは三タイプに分類できるようだ。

そのひとつは、自分のテーマにそった活動を通して広がるものである。専業主婦としてすごしてきたYさんは現在、「明るい老後を考える会」やブラジル人家族とのつきあいがある。これらは子供の手が離れた後に、社会と関わりを持つ主婦というYさんのテーマを実際に行動にうつして得たものだ。またFさんにとってのボランティア仲間は、以前からの「クリスチャンになってからのご縁」というテーマにそっている。二つ目に、既存の人間関係を主婦役割の縮小後に変容させたものがある。Sさんは今も母親だというが、それは幼い子供を育てるという、原初の母子関係とはことなる。Yさん

と夫の関係も、子供を中心とした家族における夫婦の関係から、ブラジル人家族などとの関わりのなかで、老いをともに歩む夫婦としてこれまでとは違う方向に関係を組み直している。三つ目は、自分の好きなことへの関わりを深めて得た仲間である。こうした趣味の活動は、子供時代や娘時代にやっていたものを主婦役割が縮小したのちに再び始めた、というニュアンスが強い。Sさんが子供の卒業、結婚に安堵感をおぼえ、それ以後に同窓生とのコーラスを始めたものや、Fさんが老人大学の縁で始めたハイキングがこの類である。

以上の二点をまとめると、主婦役割の縮小は、それ以前からのテーマを変更する必要がないため、生涯を左右する生き方の根本的変容(alternation)をひきおこす「転機」(turning point)ではない。[15] けれども主婦役割縮小後の人間関係からは、主婦としての義務が縮小したのち、自らの望む方向へ漸進的に人間関係を広げていく女性の姿がうかんでくる。そのため転機が生活態度を百八十度変更させるようなドラスティックな転換とすれば、主婦役割の縮小はそれ以前との継続性を保ちつつ人間関係を豊かにしていくため、ゆるやかな転換といえるだろう。

さいごに、プラースが『日本人の生き方』で提示した「道づれ」の議論を参考に、老女の個性化という側面を指摘しておきたい。プラースは、長期間にわたってその人と関わりをもち、人生をその人とともに旅していく人々を道づれ(convoys)と呼ぶ。道づれは重要な他者といわれてきたものにほぼ等しいが、長期にわたる関わりをもつ点が強調される。[16] 一方、主婦役割の縮小後のゆるやかな転換を支えているのは、テーマにそった人物として当事者が把握している人々である。[17]

例えばFさんの場合、主婦役割縮小の危機や友人の死の時に、教会からみの人にすすめられ何かの活動に関わる。それによって電話相談の仲間や教会、老人大学の友人がつくられ、「クリスチャンになってからのご縁」に従って活動するというFさんのテーマは具体性をもつようになる。つまり彼らの存在なしに、現在のテーマだけが先にあるわけではない。むしろこうした人々との関わりのなかでテーマは明確になっていくため、彼らは当事者の人生の、現時点における共同製作者という側面がある。テーマにそって新しくふえた人々は、過去における関わりがないため、当事者がどのように生きてきて、どういうふうに成長を遂げてきたかを知らない。しかしテーマは当事者が長い年月をかけてつくってきた自分の存在感の中核であり、テーマに即した人というのは、それを承認し、より確実なものにする存在である。故にプラースのいう「人生の確認のためのフィードバック」を可能にする点では、道づれと似た機能をもつ。

我々が「より具体的で個別的なかたちで人生の意味を実感」できるのは、道づれが「私たちの生活史を認定し、公認の伝記を私たちに与えてくれる」ためだとプラースはいう。[18] 故にテーマに即した人々もまた、当事者を自分がだれとも違う過去をもつ独自の存在にすることを促進するものといえるだろう。ちょうどFさんが活動の基盤と人間関係をもつ大阪を離れたがらないように、三人の老女はみな自分は他のだれとも違う過去をもった独自の存在であることを承

認する人々との間で生きている。テーマにそってつくられる人間関係の間で、老女の生き方はますます個性化していくようだ。

論文の最初に述べたように、本稿は多分にパイロットスタディである。老女の生き方を考えるための手がかりを得るという当初の目的は多少は果たせたかもしれないが、三つの事例からうかがえるゆるやかな転換や老女の個性化という側面が、より具体的にどのようなものであるかを解明するには、いうまでもなく事例研究の積み重ねが必要である。そしてそれらの側面はどの程度女性の老いとして一般化できるものか、男性の老いと区別される女性の老いの特性として扱えるものであるかは、本稿では全くふれていない。このような課題は、ライフヒストリー法による研究だけでは十分ではなく、多様な方法論を駆使した研究が求められることは明らかだ。もとより本稿は試みの第一歩であり、老女の生き方へのさらなる接近は今後の課題としたい。

注

(1) 井上美登利「映画のなかのおばあさん」樋口恵子編『エイジズム』学陽書房、一九九二年、一四六－一五三ページ。

(2) 「姥シリーズ」とは、『姥ざかり』『姥ときめき』『姥うかれ』『姥勝手』（いずれも新潮文庫）をさす。主人公の歌子（七六歳）はもと船場のご寮人さんであり、現在は神戸のマンションに一人暮らしをしているという設定である。

(3) 例えば中野卓の『明治四三年京都－ある商家の若妻の日記』（新曜社、一九八一年）には、商家に嫁いだ嫁が、家の女主人になるべく、姑からその家の年中行事やしきたりについて学んでいく様子が描かれている。

(4) 天野正子「老いに取り組む女たち」『思想の科学』、一九七二年八号、八一－九十ページ。天木志保美「中高年女性の生き方と病理」三沢謙一ほか編『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房、一九八九年、一五三－一八六ページなど。

(5) 井上俊「老いのイメージ」『老いの発見2老いのパラダイム』岩波書店、一九八六年、一七五－一八四ページ。

(6) 老女の語りをデータとして活用した研究としては、中野卓（編）『口述の生活史』御茶ノ水書房、一九七七年、橋本満『物語としての「家」』行路社、一九九四年がある。いずれも著者の社会学の方法論上の問題意識に基づいており、女性の老いを直接のテーマにしていない。老女に関する研究では、介護負担や老後の生活保障など女性の老いがはらむ問題状況を扱うものが多く、それを除くと都市社会学の視点からは、安藤究、高橋勇悦「大都市高齢女性の祖母性」『総合都市研究』四五号、一九九二年、九七－一一五頁、安藤究「新しい祖母の誕生？」森岡清志、中村一樹編『変容する高齢者像』日本評論社、一九九四年、七九－一一八頁などがある。フェミニズムの視点からは男性と女性で経験する老いに違いを示唆した論文として、江原由美子「男性の老い、女性の老い」今井仁司ほか編『老いの様式』誠信書房、一九八七年、二五八－二八一頁、上野千鶴子「老人問題と老後問題の落差」『老いの発見2老いのパラダイム』岩波書店、一九八六年、一一一－一三六頁（のちに「生きられた経験としての老後」として『近代家族の成立と終焉』に収録）など。

(7) 例えばArber, S. and Ginn, J.(eds.) *Connecting Gender and Ageing*, Open Univ. Press, 1995など。とりわけ五章、Arber, S.

and Ginn, J. "Choice and Constraint in the Retirement of Older Married Women" pp.69-86.、六章、Bernard, M., Itzin, C., Phillipson, C. and Skucha, J. "Genderd Work, Genderd Retirement" pp.56-68.を参照。

(8) Shenk, D., and Achenbaum, A., 1994 "introduction" in *Changing Perceptions of Aging and the Aged*, Shenk, D., and Achenbaum, A., (eds.) Springer Publishing Company, pp.XⅠ-XⅢ.

(9) 例えばKaufmann, S., *Ageless Self, Source of Meaning in Later Life*, Univ. of Wisconsin Press, 1986（邦訳『エイジレスセルフ』筑摩書房、一九八八年）、Tompson, P., "I Don't Feel Old: Subjective Ageing and The Search for Meaning in Later Life", in *Ageing and Society*, March 1992, 12(1), pp.23-47, Cambridge Univ. Pressなど。カウフマンの分析枠組みを踏襲したものとして、Mullen P. B., *Listening to Old Voices: Forklore, Life Story and Elderly*, Univ. of Illinois Press, 1992、また女性を対象にした調査研究として、Ingrisch, D., 1995 "Conformity and Resistance as Woman Age" in *Connecting Gender and Ageing*, Arber, S and Ginn, J. (eds.), Open Univ. Press, pp.42-55がある。

(10) ライフストーリーとライフヒストリーを総称してライフヒストリーとよぶことが多いが、両者の厳密な区別はベルトーにしたがった。つまりインタヴュー対象者が語るのがライフストーリー、そのライフストーリーに歴史的事実や二次資料で調査者が補充したものがライフヒストリーである。

(11) カウフマン（幾島幸子訳）『エイジレスセルフ』筑摩書房、一九八八年、三五ページ。

(12) カウフマン上掲書、二〇八ページ。

(13) 日本近代における家族変動と人口学的世代については、落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣、一九九四年、五四－五七頁、八六、一〇八頁を参照。

(14) 調査は一九九六年八月から九月にかけて行ない、ひとりについて合計五～八時間の話を、二回に分けて聞いた。調査対象者には事前にこれまで歩んできた人生の思い出や現在の生活について話してほしいとこちらの意向を伝え、二回とも原則として本人のペースで好きなように話してもらった。インタヴュー調査に応じてくださった三人のかたと、私の要望にそう人を紹介してくださった方々に、この場をかりて感謝いたします。

(15) 当事者のもつ主観的な意味世界に重きをおいた、オルタネーション（翻身）や転機の概念については、バーガー『社会学への招待』新曜社、一九七七年、及び渡辺牧「翻身論序説」『ソシオロゴス』第八号、一九八四年を参照。

(16) プラース（井上俊、杉野目康子訳）『日本人の生き方』、岩波書店、一九八五年、三三〇ページ。

(17) 今回の事例でいえば、主婦役割縮小後に再編された既存の人間関係、すなわちSさんにとっての子供やYさんにとっての夫は、道づれの概念が含む時間的な持続と累積の要素を備えていると思われる。

(18) プラース上掲書、三二七頁。

Gentle Transition —Aged women in Case Studies

Yoko MIZUSHIMA

The purpose of the paper is to examine aged women's way of life based on case studies. Once, there was a turning point called "Shamoji-watasi" in the course of women's life, and the position as a mother-in-law waited for a woman who finished her role as a housewife. In modern Japanese society, however, the position as a mother-in-law in cultural institution has become vague idea. As a result, it is said to be difficult to define a woman's life after finishing her role as a housewife. By applying a lifehistory method, I would like to examine how the women in this period cope with decline of role as a housewife, and how they reconstruct human relations afterward.

I observe the cases of three women: 75 years old, 72 years old and 65 years old. The analysis shows that a woman who finished her role as a housewife starts to enrich her human relations. In doing so, she does not change her core identity. Rather, through this transition her former self image seems to become clearer. In conclusion, the decline of women's role as a housewife is not a drastic turning point which requires fundamental change in the course of women's life.

As the subject of aged women has not been studied well yet, it is dangerous to generalize about women's aging from these findings. Therefore, it has to be noted that today's study describes one feature of woman's aging. However, I believe that my findings present keys for further studies and bring up the needs for more intensive surveys.

Key Words

lifehistory, women's aging, role as a housewife, turning point